自己の面目を明むれば祖佛と同じ、如何が自己心を明めん。強ひて節目を生ずること勿れ。

と言はれた。此の節目と云ふのは卽ち是非善惡利害得失等一切の差別の考で、此の差別に迷うて本心を見究めることが出來ぬから、もと〳〵佛祖と同じ身でありながら、いよ〳〵佛祖と遠ざかるやうになるのである。而して所謂本心とは何かといふと、心の主人公で一切の心的現象を率ゐるところのものである。

心的現象は前にも述べた如く實に千樣萬態、複雜極るものであるが、且くこれを大きく別けて二とすることが出來る。曰く理知、曰く情意である。此の二つの爭ひからさま〳〵の妄想も起るので、それが又一方に走つて何事も理窟詰めで取り扱はうとする理智的の人は、頭が冷やかで人情に薄くなつて完全な人格と云ふことが出來ないし、またその反對に情意の方のみに流れて、少しも理智の明がないといふのも勿論迷ひたるを免れぬ。佛敎では理智に眩きを見惑といひ、理智の方では明かでも情意に於て迷ひのあるのを思惑といふ、「夢とあきらめりや、何んでもないがそこが凡夫でねえあなた」此の「夢とあきらめる」のは見惑で、「そこが凡夫でねえあなた」といふのは思惑である、此の二の惑を斷除して、理智に走らず情意に流れず、能く之れを調和して中正を保つといふことは、前にも云うた智情意の三を圓滿にするので、禪の修養の要旨とするところである。

先づ理智卽ち知識の上から禪を觀るに、禪の所謂知識は一切相對差別の考を超絕した絕對平等の正知見で、一切の差別相對を融合し綜括した歸結の處に立つ、所謂孤峰頂上に立つて下瞰するものである。故に禪の知識の赴くところ何ものゝ見ざるなく、何ものゝ明ならざるはない。一體吾々は物を二つ以上に見るからそこに相對して彼れか此れかと迷を生ずるので、善と云へば惡、是と云へば非、得と云へば失、利と云へば害といふやうに、差別の見に拘はれ相ひ對比して狂狗塊を逐ふの愚をなし、迷いよ〳〵極りなきに至る。若し一超して絕對平等の處に立ち、これら一切の差別を泯ずるならば、釋然として大解脫の門開け、大自在の境界現はれるのである。而して此の頂上に

立つて下瞰するまでに到つたならは、それから更に復た下つて善惡是非利害得失すべての葛藤裡に處して、快刀亂麻を斷つが如く事に應じ物に接して、自在無碍に働いてゆくといふのが禪の智慧である。西洋の諺に「旅行の究竟目的は同一起點に歸るにあり」といふが、歸るが目的ならば行かぬがよい、行くのは目的だか、究竟目的ではない、之れを究竟目的とせば、行き切りでは何の役にも立たぬ、同一起點に歸つたが、行かないのとは違ふ、卽ち到り得、歸り來つて別事なしといふ所に妙はある、禪の知識はよく現在差別の見を泯じて、旅行の目的を達し、さて同一起點に歸り來り、下りて此の現在差別の裡に處して働いてゆくところに其の妙要があるので、その事は前來禪の敎理に於いて說述した通りであるから今又說くを要せぬ。

されば禪智の見るところは洽く一切に亙るので、佛眼禪師の偈に

心卽是佛。佛卽是心。心佛如々。亙古亙今。

とあるが、實に禪の智は之れを中外に施して悖らず、これを古今に通じて謬らずといふ絕對の處に立つのである。故に禪智の妙用は、その細や無間に入り、其の大や方處を絕するで、一切事一切處、徹見せざるはなく明瞭せざるはない、從つて禪には迷信の無いことも斷言が出來る。本來無東西、何れの處にか南北あらむといふ禪の見識からすれば、方位方角に迷ふといふやうなこともなく、すべて些々たる事柄に神經を痛めるやうなことはない。物外和尙曾て備後三原の藩主の請に應じて畫をかいた、トコロがそれは孤鴈の圖であつたので、鴈は多くの友と列をなして翔けるものであるのに孤鴈は緣喜がよくないとて、藩主は少からずこれを氣にせられた、ソコで物外和尙更に筆を執つて

初雁や、また後からもあとからも。

と賛をせられたといふことであるが、是れ亦目前の鎖事に拘泥せずして大觀するところの禪智の妙用を見るに足るものである。加賀の服部元好といふ醫者は、自分の家が火災に罹つた時、平然として少しも氣にかけないので、或る人之れを怪んで「お醫者さん家の黑燒何にする」といふと元好は「大工左官の腹藥なり」と答へたといふ、これも亦達觀の一例として見られるもので

ある。

禪は屢々云へるが如く、差別中に在つて平等を認め、平等の上に差別を認むるものであるから、一面に於いてはまた自己の權威を重んじ、徒に他の後に從はぬといふ見識も、禪者の人格の一部としてよく見るところである。

雪潭和尚が犬山侯の御前に法を講せんとしたとき、公は垂簾の内より聽かれんとせしに、雪潭和尚大に罵つて「我が説教には糟はない、漉して聽くには及ばぬ」と云つたとのことである。また近世の大德晦巖和尚は宇和島の伊達公と相對して語るの時、公が庭前の竹を指して「此の竹は節も出來ず何にもならぬ竹であるが一體何といふ竹であるか」と問うたに對し、「たゞ外見ばかり張つて何の役にも立たぬから大名竹と申す」といひ放つたといふ。その權貴に阿らずして、言はんと欲するところを欲するがまゝに云ふやうなことも亦禪の一見識である。

斯くの如くであるから禪の修養によりて得たる知識は、應用自在、活殺自由なものである。一體吾々の知識は常に紛然雜然として居て事に當つて明瞭を缺き、或は誤認したりするは、よく整理せられ統一せられて居らぬからである。而して禪は一面よりいふと、吾々の日常の知識を整頓して、十のものならば五に纏め、五は二に、二は一に纏めるといふ風にして遂にその根本に統一するものである。其の事は平生少しの問題でも起つて、之れが解決に迷ふとき、しばらく靜坐冥想して考究すれば遂にその歸するところを得るに見ても明かである。

これは傳説であつて正しき事實として見ることは出來まいが、柳生但馬守宗矩の子、十兵衛が、自分の技に誇つて發狂したとき、澤庵之に向つて「汝未だ劍法を知らず何ぞ誇るに足らん」といふと、十兵衛躍起となつて「我れ實に劍法の極意を究む、汝何の得る所かあつて我を慢するや」といふ、澤庵乃ち一首の歌を示していふ「此の歌の意味を解せぬうちは以て劍を語るに足らぬ」と、その歌は

行むな立つな坐わるなねすわるな、
行くなかへるな知るも知らぬも。

といふのであるが、十兵衛、右より見、左より見、上より見、下より見て一心に考へたが意味が解らぬ。解らぬ筈である、この歌は一切の相對迷執を拂つて、不去不來不一不異不生不滅不增不減といふ八不の道理を示したもので、如何にも手の付けやうのない歌である。十兵衛、一室に飛び込むで寢食を忘れて、專心に工夫考究した結果、竟に豁然として手を拍つたときにはその狂氣は癒つて居たといふ。之れ亦雜駁なる知識を統一して其の本に歸結せしめた靜坐冥想の力と見ることが出來よう。要するに禪は、人格修養の知識的方面として見ても、如何にその力の大なるかは認られざるを得ないのである。

二　情意の修養

斯くの如く、禪は知識を統一して自己の價値と權威とを定め、事を見ること明かに、自ら信ずること篤くなるのであるから、區々たる他の毀譽褒貶に動かされず、苦樂昇沈の境に處し、生死岸頭に立つて苦み惑ふやうなこともない。常に從容として迫らず、綽々として餘裕あるのであるから、胸中の閑日月、能く萬象を美化して、

不盡乾坤燈外燈。無邊風月眼中眼。柳暗花明千萬戸。敲門處々有人應。

といふ風に趣味を味ふことも出來るので、程子の所謂「廓然大公。物來つて順應す」といふ境界、禪者の胸中は實に光風霽月の趣がある。卽ち禪者は孤峰頂上に立つて下瞰するのであるからこの無私大公の處より一切を見て、「三界は吾が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」といふ佛の大慈悲心に住し、

慈悲の眼に憎しと思ふ者ぞなき、

といふ風に如何なる者をも、之れを哀愍し護念してゆくといふ溫い情が、油然として起るのである。一二の例を擧げると、

榮西禪師の許に、一日尾羽打ち枯らした武士が妻子の飢渴を訴へて金を借りに行つた。禪師とて枯淡な生活をされて居ること故、貸し與へる金錢が一文でもあらう筈がない。而も禪師の慈悲、眼前に困窮する者を棄て措くこと

は出來ぬ。ソコで佛殿に安置して在つたところの藥師如來の毫光を抽き取つて之れを金に換へよとて與へられた、侍者之れを見て驚いて、「如何に人助けなればとて、如來の毫光を抽き取るとは、あまり亂暴ななされ方では御座らぬか」といふと、禪師は「今のやうな人は實に憫むべき衆生である。斯かる衆生を若し佛が御覽あらば、手を折り脚を折つても救はれずには措かれまい、況して毫光一つ與へる位のことは何でもない」と言はれたといふ話がある。

また黃檗の碩德鐵眼禪師は、大藏經の勝緣を結ばんとて、空手起つて四方に有志の投資を募つたところが、觀音寺の妙守といふ人、その志を讃し白金一千兩を喜捨し、遠近その德を聞き風を望んで應ずるといふ有樣で、いよいよ上梓することゝなると、會々大阪に大洪水があつて、市民困阨の狀目も當てられぬといふ有樣であつた。鐵眼禪師是に於いてその集め得た大金を殘らず出して貧民を救濟せられた、そこで復た無一物となつて行脚に出で、資金漸く積んだので刻藏に掛らうとすると、今度は宇治近邊が饑饉の爲めに、餓孚途に横はるといふのを聞き、又其資金全部を擧げて之れを救つた、斯くすること都合三度に及んだといふ。禪師の如きは實に活藏經を以つて人を救濟せられたものといふ可きである。

今一つ例をいふと、盤珪禪師曾て播磨の結制に於いて數百人の雲水を集め法門を擧揚せられて居たとき、會中に賊僧があつて毎日衣類金子を紛失するものあるので、大衆は非常に難儀して居た、初のほどは互に疑ひ合つて居たが、後には賊僧がそれと知れたので、一同相談の上禪師の前に出て、事情を訴へ賊僧を逐ひ出されんことを請うた。禪師は可し〳〵と言はれたまゝ數日を經てもその儘うち棄てゝ置かれた、その後再三大衆より申し出たが依然として處置せられぬので、大衆は憤慨して遂に一同退山するとまで迫つた。スルと禪師は笑つて言はれるには「悟道善行の僧は敎ふるに及ばず、去らんと欲せば去れ、吾がこの結制は道を知らずして惡行を爲す者を感化せん爲めである。盜みをする如き僧は尙ほ更ら逐ひ出すに忍びぬ」と、ソコで大衆も禪師の高德に感服して各〳〵淺薄な考を恥ぢ、また會下に安居せんことを願ひ、彼の賊僧も之れを聞いて坐中に出で、中心先非を悔悟して懺謝し、以後はま

ことに德行堅固の僧となつたといふことである。

斯くの如く、差別の迷執を泯じ、己の我見を忘じた禪者の情は、如何なる人に對しても老婆心を以つて接し、雨露の百草を霑すが如く、機に應じ緣に從つてよく、感動せしめ、よく敎化してゆくのである。

禪の智と情の方面は實に如上の通りであるが、更に意志の方面に就いて云ふと、意志鍛錬といふことは、殊に禪の主とするところであつて、死生の問題の如きに對しても、何ら狼狽することもなく、煩悶することもなく、泰然また淡然たるを得ることは前にも述べた通りである。

天寧の芙蓉道楷禪師、その道譽德聲天聽に達し、徽宗皇帝より定照禪師の號と幷に紫衣を賜ひ、內臣に持して禪師の許に贈らしめた。禪師天恩を拜謝し竟りて其の志を陳べて曰く「出家の時營て重誓あり、利名の爲にせず、專誠に學道すべしと、父母此を以て聽許せり、今若し本志を守らずして寵光を竊冒せば、則ち佛法の親盟に背かん」と。乃ち具さに表を修めてこれを固辭した。帝更に旨を降して受けしめたが禪師は確守して受けぬ。ソコで遂に命を拒むの罪に坐して棘寺に下されることになつた。而るに寺吏、有司に上聞して更に淄州に貶さんとした。有司の曰ふには、「若し疾あらば爲めに刑を免せよ」と。乃ち禪師に問ふて「疾あることなしや」といふと。「疾なし」と答ふ。その體を檢して見て、「灸の瘢があるのは疾あるのではないか」といふと、「イヤ昔は疾あつたが今は癒つた」といひ。疾ありと云つて刑を免るゝやうにと懇々諭されたが、禪師は「厚意は忝ないが、疾なきに疾ありといふ如き妄語はわが心安んずる所でない」と云つて遂に從容として刑に就いたといふ。

その遺偈に曰く

吾れ年七十六。世緣今已に足る。生きて天堂を愛せず。死して地獄を怕れず。手を撒じ身を橫ふ三界の外。騰々任運何ぞ拘束せん。

と、天堂を愛せず地獄を怕れず、適くところとして任運に個體安舒、些の拘束なき達人の胸中は天空海濶の如く、眞に生死即涅槃の處に安住して居るのである。

禪者は斯の決定不動の處に安住して居るのであるから、世の毀譽褒貶の如

きは一切管するところでない。所謂道を信ずること篤く、自ら知ること明かなるもので、人の是非を顧みず、一家之れを非とするも、一國一州之れを非とするも、天下擧つて之れを非とするも、而も力行して惑はざるの概あることは、得道の士に屢々見る事實である。

佛源禪師は常に非常な愛錢家で、客嗇を以て聞えて居た。常に大きな甕を藏して、一錢得れば一錢をその甕に投じ、一文得ればまた一文をその甕に容れるといふ風であつたので世の人唾棄彈指して種々に惡口を浴びせかけたが、禪師は恬然として意に介せず、ます〳〵金錢を惜み、いよ〳〵貯蓄した。そのうち寺が火事に遭うて、堂塔伽藍悉く灰燼に歸したので、檀信徒集合して種々再建のことを議した。その時禪師は自ら平素爪の先に火を點すやうにして蓄へた例の一甕を出して、悉く以つて伽藍再建の費に充てられた。而して示していふには、

君子は財を惜む、之を用ふるに道あればなり。

と、卽ち用ふべきに當つては千萬金といへども惜まず、用ふべからざる時に於いては一文一錢といへども浪費してはならぬといふ意味で、佛源禪師はこの意味を體現せられるに就いて、自ら信ずるところ、見るところに從つて世の毀譽の如きは一切顧みられなかつたのである。

拱辰禪師は非常な苦辛をして佛祖の傳記を作つた、その稿成るや、これを持つて帝都に上り天覽に供せんとて途に船に乘り船中に一僧に會して種々語り合つた序、其の稿を示して天覽に供せんと欲する意を漏した。船が某地に着くや否やその僧は稿を奪つて、雲をかすみと逃げ失せた。拱辰已むを得ずして其處から引き返へして仕舞つたが、後幾もなくしてその書が勅命によつて印行され、世の人廣く之れを見るやうになつた。併しながら拱辰は平然としてそれに對して何もいはぬ。或る人が「斯んな馬鹿々々しいことはない、何故默つて居るか」といふと、「我が目的とするところは、如何にもして佛祖の勝躅を廣く世の人に知らしたいといふに外ならぬ。而して今やそれが上梓されて公に行はれるやうになつたのであるから、吾が素志は果すことを得たといふもの、吾れ素より名の爲めにしたのでない、著者の名が他人を以て顯

はされたる如き、敢て答むるところでない」と答へたといふ。その書といふのは卽ち有名な景德傳燈錄である。

斯くの如く禪は知識を明にし、感情を圓滿にし、意志を鍛錬して、物を明察し、他に同情し、事に動せずして自利々他を並行せしめ、共に理想の樂天地に逍遙せんとするものであるが、其要とするところは、單に之れを知り之れを思ふにあらずして、實際に行ふ上にある。寰中禪師衆に示して云く

一丈を說得せんよりは一尺を行取せんには如かず、一尺を說得せんよりは一寸を行取せんには若かず。

と、卽ち空理空論に住して獨り得たりとする者を斥け、尺說よりも寸行、丈說よりも尺行あらんことを貴ぶので、之れを實地に行ふところに禪の妙味は存するのである。それらの修養の根本に就いては、前來屢々繰り返したところであるが、詮ずるところ禪の妙用は、己を明め、己を知るといふ處に根ざすので、直に本源を究めて事を解決するにある。先に云つた盤珪禪師の處に或る僧が往つて、「私は生れ付き短氣で困ります」といふと、「ハヽア御前は奇妙なものを生れついたものだ、生れつきなら何時もあるであらう、一つ今こゝに出して見せるが可い」といはれた。「イエ今はありませぬが不圖すると出て困ります」といふと、禪師示して「不圖すると出るのならば生れつきではない。自分勝手に起すところのものである。自分がわが儘で勝手に起しながら生れつきなどゝいふのは大なる心得違ひで、父母が生みつけた短氣でいもある如く云ふは、以ての外の親不孝である」と曰はれたといふ話があるが、すべて自分がその本を知らぬ爲めに、そこに迷ひが生ずるので、迷を去つて其本源天眞の處に歸るのが禪の要旨である。

扨て前來樣々な方面から禪を觀察し來つたが、要するに禪の旨は智情意の三方面を圓滿にし、理智に走らず、情意に傾かずして終始事每に中正を保ち、以て佛祖と異らざる作業を爲すといふに歸するのである。こゝに有名なる司馬溫公が解禪の偈を揭げて、以てこの講話を結ぶことゝしよう。

忿怒は烈火の如く。利欲は銛鋒の如し。終朝常に戚々たり。是を阿鼻獄と名く。

二

顏回は陋巷に安んじ。孟軻は浩然を養ふ。富貴は浮雲の如し。是を極樂國と名く。

三

孝道神明に通じ。忠信蠻陌に行はれ。善を積んで百祥を來す。是れを名けて因果と作す。

四

言は百世の師と爲り。行は天下の法と爲る。久久にして掩ふ可らず。是れを不壞身と名く。

五

仁は人の安宅なり。義は人の正路なり。之れを行うて誠にして且つ久し。是を光明藏と名く。

六

道意一身に修め。功德萬物を被ふ。賢と爲り大聖と爲る。是れを佛菩薩と名く。

阿鼻の地獄といひ、極樂といふも皆な外に在るのでない、たゞ自己の一心に在り。不壞身と云ひ、光明藏と云ひ、佛菩薩といふ皆唯心個身の外に求むべきものでない。覿してこゝに至り、よく是れを了得する者は卽ち禪理を會する者である。

「大聖は生死を心に任す、生死を身に任す、生死を道に任す、生死を生死に任す、この宗旨顯はるゝ古今の時にあらずと雖も、行佛の威儀忽爾として行盡するなり、

道元禪師」

附錄 清言二種

附錄 清言二種

上筆嘯

其一

書曰、必有容德乃大、必有忍乃有濟、君子立心、未有不成於容忍而敗於不容忍也、容則能恕人、忍則能耐事、一毫之咈、卽勃然而怒、一事之違、卽憤然而發、是無涵養之力、薄福之人也、是故大丈夫、當容人而不可爲人所容、當制欲而不可爲欲所制、觀妻師德丙吉之爲人、則氣自平而理自明矣。

【訓】書に曰く必ず容ることと有りて德乃ち大なり、必ず忍ぶことと有りて乃ち濟なることと有りと云り、君子心を立る、未だ容忍に成りて而して

「一毫之咈」微か許りの目障の行違ひ
「勃然」顔色遽かに變る貌
「憤然」怒る貌
「涵養」訓練修養のこと

容忍せざるに敗れざるは有らざるなり、容とは則ち能く人を恕る、忍とは則ち能く事に耐ゆ、一毫の咈、卽ち勃然として怒り、一事の違、卽ち憤然として發す、是れ涵養の力無き薄福の人なり、是の故に、大丈夫、當に人を容るべくして而して人の爲めに容れらる可からず、當に欲を制すべくして而して欲の爲めに制せらる可からず、婁師德・丙吉が人と爲りを觀れば、則ち氣自から平かにして而して理自から明かなり。

其二

辱之一事、最所難忍、自古豪傑之士、多由此敗也、竊意辱之來也、察其人如何、彼爲小人耶、則直在我、何怒之有、彼爲君子也、則直在彼、何怒之有、世之人不審辱之所自來、一以怒應之、此其所以相仇而相害也歟、書曰、必有忍其乃有濟、意正如此。

【訓】辱の一事は最も忍び難き所なり、古より豪傑の士、多く此に由て敗る、竊かに意ふに辱の來るや、其の人如何と察すべし、彼れ小人たらんか、則ち直我れに在り、何の怒ることか之れ在らん、彼れ君子たらんか、則ち直彼れに在り、何の怒ることか之れ有らん、世の人、辱の自ら來る所を審にせず、ひとへに怒を以て之れに應ず、此れ其の相仇して而して相害する所以なるか、書に曰く、必ず忍ぶこと有りて其れ乃ち濟なること有りとは、意正に此の如し。

「小人」心曲りたる者
「君子」有德なる人

其三

我以厚待人、人以薄待我、匪薄也、我厚之未至也、我以禮接人、人以虐加我、匪虐也、我禮之未至也、厚也禮也、自我行之、薄也虐也、自我召之、彼何罪耶、是故不怨天不尤人、庶幾君子矣。

【訓】我厚きを以て人を待たんに、人薄きを以て我れを待たば、薄きに匪ず、我が厚きことの未だ至らざるなり、我禮を以て人に接らんに、人虐を以て我れに加へば、虐に匪ず、我が禮の未だ至らざるなり、厚たり

禮たり我れよりして之れを行ふ薄たり虐たり我れより之れを召く、彼れ何の罪かあらんや、是の故に天を怨みず人を尤めず、君子に庶幾らんか。

其四

妬寵而恃勢、爭妍而取憐、此妾婦之道也、近世士大夫、見權勢之人、爭相趨附媚之、惟恐後、得一美言則喜溢於色、稍見抑之、則局脊不自安、又何異于妾婦之道也、夫壽夭窮通、天之命也、彼固有權勢矣、亦不能外於天、而壽夭窮通於我也、諉諉然以諛之、恐恐然以附之、亦可愧也夫。

「士大夫」官位有る人
「局脊」(局蹐)身をかがめ足をちぢめて行く即畏縮して拔足すること

【訓】寵を妬んで而して勢を恃み、妍を爭ふて而して憐みを取る、此妾婦の道なり、近世の士大夫、權勢の人を見て爭ふて相趨むき附て之れに媚び、惟だ後れんことを恐る、一美言を得るときは則ち喜び色に溢る、稍之れを抑へらるゝときは則ち局背して自ら安せず、又何ぞ妾婦の道に異らんや、夫れ壽夭窮通は天の命なり、彼れ固に權勢有り、亦た天より外なること能はず、而して壽夭窮通我れに於けるや、諉々然として以て之れに諛ひ、恐々然として以て之れに附く、亦た愧べき夫。

「壽夭」長命と短命
「窮通」(窮達)零落と出世
「諉々然」巧言を以てする貌

其五

不得於天則怨天、不得於人則尤人、此古今之同情也、殊不知抑揚順逆、皆非人力所能爲、而皆造物使之然也、造物亦非有惡我好我而爲之也、彼亦不知、予亦不知、莫之爲而爲之耳、怨於天者不知天、尤於人者不知命、聖人所不取也、大丈夫胸中灑灑落落、如光風霽月、任其自然、何有一毫之動心哉。

「抑揚」おさへ又あげること
「順逆」よくなり惡くなること
「造物」萬物を創造したる神のこと

【訓】天に得られざる時は則ち天を怨み、人に得られざる時は則ち人を尤む、此れ古今の同情なり、殊に抑揚順逆は皆人力の能爲る所に非ず、而して皆造物之をして然らしむることを知らざるなり、造物も亦た我を惡み我を好んで而して之れを爲すこと有るに非ず、彼も亦た

「洒々」洗へる知くさつぱりとしたる貌

「落々」廣くして小節に係らざる貌

知らず、予も亦た知らず、之を爲すこと莫くして而して之を爲す耳、天を怨む者は天を知らず、人を尤むる者は命を知らず、聖人の取らざる所なり、大丈夫の胸中、灑々落々、光風霽月の其の自然に任するが如し、何ぞ一毫の心を動かすこと有らん哉、

其六

蝸涎不レ滿レ穀、聊足以自濡、昇レ高不レ知レ疲、竟作レ粘レ壁枯、東坡之言、深可レ爲レ知レ進不レ知レ退者之戒、夫人事之役役也、計謀之敝敝也、人皆以人事可以致富貴、計謀可以致功名、殊不レ知一作一輟有物宰之、而成者非其能也、命之至也、況爲之而不成者多乎、造物無言也、人不可以感其聽、造物無形也、人不可以賓其公、世之人役役敝敝、於百年之間無頃刻之自安者、不亦深可哀耶、不足以爲造物、撓、深足以爲造物、咲。

「役々」求むる處有つて止まらざること

「敝々」勤苦努力して極めんとする貌

「一作一輟」起と終

「宰」司施すること

「命」天命天運のこと

【訓】蝸涎穀に滿たざれども、聊か以て自ら濡すに足れり、高きに昇りて疲るゝを知らず、竟に壁に粘して枯るゝことを作す、東坡の言、深く進むことを知りて退くことを知らざる者の戒とす可し、夫れ人事の役役たるや、計謀の敝敝たるや、人皆以く人事以て富貴を致す可く、計謀以て功名を致す可しと、殊に一作一輟物之に宰たること有るを知らず、之を爲して而して成る者も其の能するに非ず、命の至なり、況や之を爲して而して成らざる者の多きをや、造物言ふこと無し、人以て其の聽ことを感ず可からず、造物形無し、人以て其の公を賓る可からず、世の人役々敝々として、百年の間に於て頃刻も之を自ら安んずる者無し、亦た深く哀む可からざらんや、以て造物の爲に撓るゝに足らず、深く以て造物の爲に咲るゝに足れり。

其七

以言譏人、此學者之大病、取禍之大端也、夫君子存心皆天理也、天

理存則心平而氣和、心平而氣和則人有過自能容之矣、尚何用言譏之哉、大抵好以言譏人者、必其忮心之重也、惟其忮心之重也、所以見人富貴則忌之、見人聲名則疾之、忌之疾之之心、蓄之於平日、譏之激之之言、發之於尋常、殊不知結怨已深、構禍已稔、身亡家敗、不可已矣、是故君子貴乎養心焉。

「大端」大なる始め因緒なり

【訓】言を以て人を譏る、此學者の大病、禍を取るの大端なり、夫れ君子の心を存すること皆天理なり、天理存する時は則ち心平かにして而して氣和らぐ、心平にして而して氣和らぐときは則ち人過有れども自ら能く之れを容る、尚ほ何んぞ言を用ひて之れを譏らんや、大抵好んで言を以て人を譏る者は、必ず其の心を忮ふことの重きなり、惟だ其の心を忮ふことの重きにや、所以に人の富貴を見るときは則ち之れを忌み、人の聲名を見るときは則ち之れを疾む、之れを忌み之れを疾むの心、之れを平日に蓄ふ、之れを譏り之れを激するの言、之れを尋常に發す、殊に知らず怨を結ぶこと已に深く、禍を構ること已に稔で、身亡び家敗るゝこと已む可からず、是の故に君子は心を養ふことを貴ぶ。

其八

稠人廣坐之中、不可極口議論、逞己之長、非惟惹妬抑亦傷人、豈無有過者在其中耶、議論到彼則彼不言而心憾、且如對官長而言清則不清者見怒、對朋友而言直則不直者見憎、彼不自責、其將謂我有意而爲之矣、彼或有禍我能免乎、惟有簡言語和顏色、隨問卽答者、庶幾可耳。

「稠人廣坐」人の集まりたる大なる場所

【訓】稠人廣坐の中、口を極て議論す可からず、己が長を逞しうすれば惟だ妬みを惹くのみに非ず、抑亦た人を傷ふ、豈過有る者の其の中に在ること無からんや、議論彼に到れば則ち彼れ言はずして而して心に憾む、且つ官長に對する如き、而も清を言ふときは則ち清ならざる

者に怒らる、朋友に對して而して直を言ふときは、則ち直ならざる者に憎まる、彼れ自ら責めず、其れ將た我れに意有りて而して之れを爲すと謂へり、彼れ或は禍有らば我れ能く免れんや、惟だ言語を簡にし顏色を和げ、問に隨うて卽ち答ふる有らば、可なるに庶幾らん耳。

其九

君子不レ可レ以レ己之長一露人之短、然天地、間長短不レ齊、物之自然也、蕞爾之軀、豈能事事而長哉、必欲レ炫二己之長一而露二人之短一、則跬歩而成レ仇矣、何也、諱莫レ諱二乎己之短一、樂莫レ樂二於掩人一、其短、彼既揚二吾之短一、而不レ憾者、千百人一人耳、然則言人之短者、可レ謂二之種一禍。

「長」長所（優所）（得意の事）
「短」短所（不得意の事）（缺點）
「蕞爾」小き貌
「跬歩」一歩

【訓】君子は己が長を以て人の短を露はす可からず、然ども天地の間長短齊しからざるは物の自然なり、蕞爾の軀、豈能く事々にして長せん哉、必ず己れが長を炫つて而して人の短を露はさんと欲するときは、則ち跬歩にして而して仇と成る、何ぞや、諱むことは己れが短より諱むことは莫く、樂みは人の其の短を掩ふより樂きは莫し、彼れ既に吾が短を揚ぐ、而して憾みざる者は千百人に一人耳、然らば則ち人の短を言ふ者は、之れ禍を種ると謂つ可し。

其十

人之病、在乎好談二其所長一、長於功名者、動輒夸二功名一、長於文章者、動輒夸二文章一、長於游歷者、動輒夸二其所一見山川之勝一、長於刑名者、動輒夸二其讞獄之情一、此皆露二其所長一、而不レ能レ養二其所長一者也、惟智者不レ言二其所長一、故能保二其長一。

「刑名」法律
「讞獄」刑罰を議すること

【訓】人の病は好んで其長ずる所を談ずるに在り、功名に長ずる者は、動もすれば輒ち功名に誇り、文章に長ずる者は、動もすれば輒ち文章に誇り、游歷に長ずる者は動もすれば輒ち其見る所の山川の勝に誇り、刑名に長ずる者は、動もすれば輒ち其の讞獄の情に誇る、此れ皆なその所長を露はして、而して其の所長を養ふこと能はざるなり、唯だ

智者のみ其の所長を言はず、故に能く其の長を保つ。

其十一

張九齡以功名忠義、奮振一時、可謂君子矣、然或者、謂其每處士大夫之有辜者、必致窮絕之地、以故一念不仁、所以無嗣、人心之不可不仁如此、哉、夫好生惡死人之常情、趨利避害世之常態、置一物於必窮之地者、君子不爲也、況作好惡於其間耶、九齡盛德之士也、一念之差、猶未免於絕嗣、丁謂盧多遜之輩、當如何耶、

【評】張九齡功名忠義を以て、一時に奮振ふ、君子也と謂つべし、然れども或る者は謂らく、其士大夫の辜有る者を處する毎に、必ず窮絕の地に致す、故を以て一念の不仁あり、所以に嗣無し、人心の仁あらずんばある可からざること此の如し、夫れ生を好み死を惡むは人の常情なり、利に趨き害を避くるは世の常態なり、一物を必窮の地に置く者、君子は爲さざるなり、況んや好惡を其の間に作んや、九齡は盛德の士なり、一念の差、猶ほ未だ絕嗣を免かれず、丁謂盧多遜の輩當に如何かすべけんや。

「以レ故」わけが有りて

其十二

寶器珍玩、不可示之於權勢之人、古琴名畫、不可夸之於貪汚之士、一經其目便動其心、既動其心必索之於我矣、有識畏禍者與之可也、不然由物生禍其能逃哉、漢晉唐宋以來如此者衆矣、可不懼耶、不然誅而薦賄無及矣。

【評】寶器珍玩之を權勢の人に示す可からず、古琴名畫之を貪汚の士に誇る可からず、一たび其の目を經れば便ち其の心を動かす、既に其の心を動かさば必ず之れを我れに索む、禍を畏るゝことを識る有らば之れを與へんこと可なり、然らずんば物に由りて禍を生ぜんこと其れ能く逃れん哉、漢晉唐宋より以來此の如き者衆し、懼れざる可けんや、懼れざる可けんや、然らずんば誅して而して賄を薦むとも及ぶ

こと無けん。

其十三

禍莫大於多欲、富莫富於知足、欲心勝則狥物、狥物則身輕而物重矣、物重則瞀然無窮、不喪其身不止、矣是、故聖人所以爲聖人者、以其無欲也、由其無欲故、視天下猶一家、一身猶衆人、安於所遇、不以貧賤異其心、不以出處異其道、淡然廓然而已爾、彼狥物者由不知足之故也、苟知足則心安、心安則事少、事少則家道和、家道和則人無不和矣、故曰、富莫富於知足。

【訓】禍は多欲より大なるは莫し、富は知足より富るは莫し、欲心勝つ時は則ち物を狥む、物を狥むるときは則ち身輕くして而して物重し、物重ければ則ち瞀然として窮り無し、其の身を喪さざれば止まず、是の故に聖人の聖人たる所以の者は、其の欲無きを以てなり、其の欲無きに由るが故に、天下を視ること一家の猶く、一身猶ほ衆人のごとく、遇ふ所に安んず、貧賤を以て其の心を異にせず、出處を以て其の道を異にせず、淡然廓然たる而已、彼の物を狥むる者は足ることを知らざるに由るが故なり、苟くも足ることを知るときは則ち心安んず、心安んずるときは則ち事少なし、事少なきときは則ち家道和す、家道和するときは則ち人和せずと云ふことなし、故に曰く、富は足ることを知るより富めるは莫し。

「醫然」暗き貌

「淡然」薄く無頓着なる貌
「廓然」心寛くして大なる貌

其十四

君子之於小人未嘗不識其形狀也、但君子容之而不與之校耳、校人之欺子產、醫者之欺晦翁、君子寧肯先起心而測之哉、彼小人以爲君子可欺也、恣其所爲、昧其本心而自以爲得計、殊不知君子視之發爲一笑而已、是故蓄鏡待物者、君子之用心也、持鏡索照者、非君子之用心也。

「校人」教師
「子産」子弟
子孫
「晦翁」愚昧なる老人

【訓】君子の小人に於る、未だ嘗て其の形狀を知らずんばあらず、但君子之れを容れて而して之れと校せざる耳、校人の子産を欺き、醫者の晦翁を欺く、君子は寧ろ肯て先づ心を起して而して之れを測らんや、彼の小人は以て君子は欺く可しと爲す、其の爲す所を恣にし、其の本心を昧まして而して自ら以て計ることを得たりと爲す、殊に君子之れを視て發して一笑を爲すことを知らざるのみ、是の故に鏡を蓄へて物を待するは、君子の心を用ふるなり、鏡を持して照さんことを索むるは、君子の心を用ふるに非ざるなり。

其十五

言之非難、處之爲難、士大夫安居之時、見人憂患害則曰、是何足以爲吾之憂、見人恤貧賤則曰、是何足以爲吾之恤、及其親履其事則色喪膽落、張張遑遑莫之措矣、殊不知張張遑遑者徒自苦耳、造化已定之矣、善乎康節之言曰、能言未是眞男子、善處方爲大丈夫、君子之生濁世、誠不可不思所以善處。

「張々遑々」うろたへ落ち付かぬ貌

【訓】之を言ふこと難きに非ず、之に處るを難しと爲す、士大夫安居の時、人の患害を憂ふるを見れば則ち曰ふ、是れ何んぞ以て吾が憂と爲るに足らん、人の貧賤を恤ふるを見れば則ち曰ふ、是れ何んぞ以て吾が恤と爲るに足らん、其の親から其の事を履むに及べば則ち色喪し膽落ち、張々遑々として之れを措くこと莫し、殊に知らず張々遑々たる者徒らに自から苦しむ耳、造化已に之を定む、善かな康節が言に曰く、能く言ふは未だ是れ眞の男子にあらず、善く處るを方に大丈夫と爲す、君子の濁世に生るゝ、誠に以て善く處る所を思はずんばある可からず。

其十六

君子之處世、不可有輕人之心、亦不可有上人之心、懷輕人之心者、類乎薄、挾上人之心者、類乎狂、何也、心貴乎平而不貴乎奈、有輕人

上人之心、則客氣常在而心無頃刻之樂矣、世之文士見愚人得富貴、則不惟顏色輕之、而心實輕之、見君子得聲名、則不特念慮妬之、而動靜亦妬之、是大可嘆也、夫天之生物、物不能齊、吾當平心以酬酢於賢愚之間可也、彼徒有輕人之心、而造物者竊笑之、彼徒有上人之心、而學問日損之、又曷若虛己接物以爲進德修業之基耶。

【訓】君子の世に處る、人を輕んずるの心有る可からず、人を輕んずるの心を懷く者は薄きに類す、人に上たるの心を挾さむ者は狂に類す、何ぞや、心平を貴んで紊るるを貴ばず、人を輕んじ人に上たるの心有るときは、則ち客氣常に在て而して心頃刻の樂無し、世の文士愚人の富貴を得るを見るときは、則ち惟だ顏色之れを輕んずるのみにあらずして而も心實に之れを輕んず、君子の聲名を得るを見るときは、則ち特に念慮之れを妬むのみにあらずして而も動靜にも亦た之れを妬む、是れ大に嘆ず可し、夫れ天の物を生ずる、物齊しき能はず、吾れ當に心を平かにして以て賢愚の間に酬酢すべくして可なり、彼れ徒らに人を輕んずるの心有れば、而も造物者竊かに之れを笑ふ、彼れ徒らに人に上たるの心有れば、而も問日に之れを損す、又曷んぞ己を虛にして物に接つて以て德に進み業を修するの基と爲るに若かん。

「客氣」本心ならぬから元氣
「文士」學者
「動靜」人の進退擧止のこと
「酬酢」應對すること（問答すること）

其十七

世事不可執一而觀、要隨時詳審可也、彼貴則此賤、彼賤則此貴、循環往來恒無定勢、然古人言富貴、儻來之物也、殊不知貧賤者亦儻來之物、其來也不可禦、其去也不可止、往來係於冥冥之中、而非人力之所能及、世之人憂貧賤如虎狼、慕富貴如蒭豢、曲計巧心務要去此而留彼、噫遑遑汲汲、是徒然耳、殊爲造物者咲。

【訓】世事一を執つて而して觀る可からず、時に隨つて詳審せんことを要せば可也、彼れ貴き時は則ち此れ賤し、彼れ賤しければ則ち此れ

「冥々」闇きこと　人智にて測り知られざること

「芻豢」牛羊曰レ芻犬豕曰レ豢

孟子芻豢之悅二我口一

「遼々汲々」忙はしくして休息せざる貌

貴し、循環往來恒に定まれる勢ひ無し、然れども古人富貴を言ふ、儒來るの物なり、殊に貧賤の者も亦た儒來るの物なることを知らず、其の來るや彗ぐ可からず、其の去るや止む可からず、往來冥々の中に係つて而して人力の能く及ぶ所に非ず、世の人貧賤を憂ふること虎狼の如く、富貴を慕ふこと芻豢の如くにす、曲計心を巧にし務めて之を去つて而して彼れを留めんことを要す、噫遼々汲々、是れ徒らに然る耳、殊に造物者の爲に咲はれん。

其十八

大凡君子之生二於世一也、不レ可レ有二過言一、過言非二吉道一也、何也、其瑕易露也、吾有二么麽之清一、動輒以包老之清、夸人、吾有二么麽之德一、動輒以顏子之德、矜己、一有二微瑕一則衆人指而責之矣、殊不知、清者己之職分、所當爲、德者天性之所當率、豈可以此而驕人哉、往往清者爲人所汚、德者爲人所敗、職此之由也、

【訓】大凡そ君子の世に生るゝや、過言有る可からず、過言は吉道に非ず、何ぞや、其瑕露れ易し、吾れに么麽の清有れば、動もすれば輒ち包老の清を以て人に夸る、吾れに么麽の德有れば、動もすれば輒ち顏子の德を以て己に矜る、一つも微瑕有らば則ち衆人指して而して之れを責む、殊に知らず、清とは己の職分の當に爲すべき處、德とは天性の當に率ふべき所なり、豈此れを以て而も人に驕る可けんや、往々清き者は人の爲に汚され、德ある者は人の爲に敗らる、此の由ることを職とすればなり。

「么麽」極めて小さき也

「微瑕」僅かな缺點

其十九

處二事一不レ可レ槪槪、亦不レ可レ孜孜、孜孜則罷軟無レ立、槪槪則粗硬惹レ禍、和易其身心、謙恭其言語、近レ恕而行則人無レ怨而躬全矣。

【訓】事を處するに槪々たる可らず、亦孜孜たる可からず、孜孜たれば

「槪々」投やりにする貌

「孜々」餘りに

則ち罷軟して立つこと無く、槩々たれば則ち粗硬にして禍を惹く、其の身心を和易にし、其の言語を謙恭にし、怨に近づいて而して行ふときは則ち人怨むこと無くして而して躬全し。

勤むる貌
「罷軟」疲れはてる
「粗硬」あらくぞんざいなること

其二十

欲心重者、雖處富貴之地、未嘗須臾之不憂也、何也、位高者多無子、則爲無子累其心矣、才高者多無位、則爲無位累其心矣、天地間萬物之不齊、彼屈此伸、此有彼無、自然之理、必求全其心之慾、則蔽々乎百歲之間、無須臾之不憂矣。

【訓】欲心重き者は、富貴の地に處ると雖も、未だ嘗て須臾も憂ずんばあらず、何ぞや、位高き者は多く子無ければ、則ち子無きが爲に其心を累はす、才高き者は多く位無ければ、則ち位無きが爲に其の心を累はす、天地の間萬物齊しからず、彼れ屈すれば此れ伸ぶ、此れ有れば彼れ無きは、自然の理なり、必ず其の心の慾を全うせんとを求むれば、則ち

「蔽々」心霧れず常に遮り蓋はれたる

蔽々乎として百歲の間須臾も憂ひずといふこと無し。

其二十一

大凡不仁之人不可與遊、何也、不仁之人、其心不常悅、悅則把袂連袵傾心覆膽、怒則持戈執戟怒氣相加矣、夫與之遊尚不可、況欲與之謀大事決大疑哉、東坡言、人心眞不可縱放、閑散既久、毛髮許事便自不堪、誠哉是言也、余平日之病正在於此、自少以讀書爲業、只把筆攻文外、世事茫茫不知、纔有毛髮事則蹙蹙不自寧矣、蓋懶惰之害也如此、陶侃豪傑士也、朝運百甓於齋外、暮運百甓於齋內、豈無所用其心哉、正以人心一懶則百骸俱怠、百骸俱怠則心日荒而萬事廢矣。

【訓】大凡不仁の人と與に遊ぶ可からず、何ぞや、不仁の人は其心常に悅びず、悅べば則ち袂を把り袵を連ね心を傾け膽を覆す、怒れば則ち

「毛髮之事」少し許りの事
「茫然」空しき貌
「慫々」氣さはくとして迫はるゝ心地
「甓」瓦に同じ
「齋」室

戈を持し戟を執て怒氣相加ふ、夫れ之れと遊ぶ尙不可也、況んや之れと大事を謀り大疑を決せんことを欲せんや、東坡が言ふ、人心眞に縱放にす可からず、閑散既に久しければ毛髮許りの事便ち自から堪へずと云ふ、誠なる哉是の言や、余平日の病正に此に在り、少より書を讀むを以て業と爲す、只筆を把て文を攻むるの外、世事茫然として知らず、縱に、毛髮の事有るときは則ち慫々として自ら寧んぜず、蓋し懶惰の害や此の如し、陶侃は豪傑の士なり、朝に百甓を齋外に運び、暮に百甓を齋內に運ぶ、豈其の心を用ふる所無からんや、正に以て人心一たび懶るときは則ち百骸俱に怠る、百骸俱に怠るときは則ち心日に荒んで而して萬事廢す。

其二十二

聖人不レ言レ命、而曰不レ知レ命無以爲君子、君子何也、蓋命者死生壽夭貧富貴賤之命也、世人不レ知レ此則百計用心於其間、殊不レ知百計用レ心者、徒然耳、命既如レ此則當寧心以待之、不レ可レ趨避也、聖人慮世人徒費其心、故曰不レ知レ命無以爲君子、非聖人自言命也。

【訓】聖人命を言はず、而して命を知らずんば以て君子たること無けんと曰ふことは何ぞや、蓋命とは死生壽夭貧富貴賤の命也、世人此れを知らざるときは則ち百計心を其の間に用ふ、殊に知らず百計心を用ふる者の徒らに然るのみ、命既に此の如くなるときは則ち當に心を寧んじて以て之れを待つべし、趨き避く可からず、聖人は世人の徒らに其の心を費やすことを慮る、故に曰く命を知らずんば、以て君子たること無けんと、聖人自ら命を言ふに非ざるなり。

其二十三

險人之前不レ可レ論人之陰私、奸人之前不レ可レ論人之機巧、我一時言之、彼一時聽之、言之者固不レ爲難、彼聽之者蓄之於心而不レ忘矣、陰者資其陰私以爲訐本、奸者用其機巧以爲利基、豈不損レ物害レ理之

甚哉、吾雖不解損物害理、亦猶抱薪資火障水資潮焚人之宅沒人之田者矣、吁此仁者之所以深戒乎。

「險人」よこしまの心有る人
「陰私」秘密
「奸人」心に惡計有る人
「機巧」手技に敏く巧みなること

【訓】險人の前人の陰私を語る可からず、奸人の前人の機巧を論ず可からず、我一時に之れを言ふ、彼一時に之れを聽く、之れを言ふ者固に難しとせず、彼の之れを聽く者之を心に蓄へて而も忘れず、險者は其の陰私を資て以て訐の本となし、好者は其の機巧を用ひて以て利の基と爲す、豈物を損し理を害するの甚しきにあらざらんや、吾れ物を損し理を害することを解せずと雖も、亦薪を抱いて火を資り、水を障へて潮を資り、人の宅を焚き、人の田を沒する者の猶し、吁此れ仁者の深く戒むる所以か。

其二十四

蘇武牧羝北海上、其節凜然固不可及矣、然取胡婦生子、抑又何也、殊不知凶奴難之者無所不至、苦之者無所不周、取婦生子、一以安凶奴、一以全性命歸漢也、不然身死其地、骨瘞虜庭、豈不辱哉、東坡謂、色慾之心雖蘇武不免、不知武矣、一婦奚足以汚其清風苦節耶。

「胡」蒙古の種族えびすのこと
「虜庭」えびすのくに
「清風苦節」心美しくして身を苦しめて節を立つること

【訓】蘇武羝を北海の上に牧ふ、其節凜然として固に及ぶ可からず、然れども胡婦を取つて子を生ますは、抑又何ぞや、殊に知らず、凶奴之れを難む者至らざる所無く、之れを苦しむる者周ねからざる所無し、婦を取りて子を生ますること、一は以て凶奴を安んじ、一は以て性命を全ふして漢に歸らんとなり、然らずんば身其の地に死し、骨を虜庭に瘞めば、豈辱ざらんや、東坡が謂ふ、色慾の心蘇武と雖も免がれずとは武を知らざるなり、一婦奚んぞ以て其の清風苦節を汚すに足らんや耶。

其二十五

大言不慚、此學者之大病、夫人雖至愚、是非之心則皆有之、或乘憤以慍人、或因喜而誇衆、殊不知人雖無言而默輕笑於胸中矣。

【訓】大言して慚ざるは此れ學者の大病也、夫れ人至愚なりと雖も是非の心は則ち皆之れ有り、或は憤に乘じて以て人を慍り、或は喜に因つて而して衆に誇る、殊に人言ふこと無しと雖も而も默して胸中に輕笑せんことを知らず。

其二十六

君子、立身、其大要、在懲忿窒慾、忿如火、不遏則燎干原矣、慾如水、不遏則降洞滔天矣、何國家之不廢、何災禍之不致哉、惟其懲忿心清而志安、惟其窒故氣暢而神安。

「降洞」水の盛んに流るゝ貌

【訓】君子の身を立つる、其大要は忿を懲め慾を窒ぐに在り、忿は火の遏ざれば則ち原を燎くが如し、慾は水の遏ざれば則ち降洞として天に滔するが如し、何の國家か廢せざる、何の災禍か致らざらん、惟其懲むが故に心清うして志安し、惟其窒ぐが故に氣暢びて神安し。

其二十七

貴人之前莫言窮、彼將謂我求其福矣、是以群賢之中淡然漠然付之謹默可也、窮也貧也皆命也、非告人而可脫者也、或有不得於心、寄言詠歌之間陶寫性靈而已。

「性靈」性質、心情
「陶寫」心懷を述べ描す

【訓】貴人の前には窮を言ふこと莫れ、彼れ將た謂へり、我に其の福を求むと、富人の前には貧を言ふこと莫れ、彼れ將た謂へり、我に其の福を求むと、是を以て群賢の中淡然漠然として之れを謹默に付せば可なり、窮や貧や皆命なり、人に告げて而して脫す可き者に非ず、或は心に得ざること有るときは、言を咏歌の間に寄せて性靈を陶寫せんのみ。

其二十八

士君子不可不大其胸襟、不大胸襟則一日之內、一歲之間、役役鬪捷於聲利之場、如之何而能樂哉、蓋以有限之身混以無窮之欲得

之於此失之於彼、強欲兩全其欲則慘然有不如意之憂矣、望望焉求之不得、僕僕焉購之無方、愈憂而愈苦、莫之能釋也、是故以六合爲一己、以壞冶爲一陶者、則無往而不樂。

「胸襟」心
「犂利」互に利を得んと呼び合ふ
「鬪捷」競爭して勝を爭ふ
「慘然」いたましき貌
「望々焉」欲願の貌
「僕々焉」煩猥の貌
「六合」宇宙
「一己」己れ一個
「壞冶」碎けたるものを鑄かしいること
「一陶」一個の燒きたる器

【訓】士君子は其胸襟を大にせざる可からず、胸襟を大にせざる時は則ち一日の內、一歲の間、役々として犂利の場に鬪捷す、之れを如何んぞ而も能く樂まんや、蓋し限り有るの身を以て混ずるに無窮の欲を以てす、之れを此に得て之れを彼こに失す、强て兩ながら其の欲を全ふせんと欲すれば則ち慘然不如意の憂有り、望々焉として之れを求むとも得ず、僕々焉として之れを購むとも方無し、愈々憂ひて而して愈々苦まん、之れ能く釋くこと莫し、是の故に六合を以て一己と爲し、壞冶を以て一陶と爲す者は、則ち往くとして而して樂しまずと云ふこと無し。

其二十九

人家、禍患、皆自多事生來、夫見位高金多者、未嘗不願與之交也、見勢崇權重者、未嘗不願與之接也、而不知一交一接之間禍患由此而基焉、善於保安者、盡以清靜省事爲本、窮通有命、徒事紛紛、夫何益哉。

「清靜省事」安寧無事
「紛々」つまらぬ雜事に忙はしきこと

【訓】人家の禍患は皆多事より生じ來る、夫れ位高く金多き者を見ては、未だ嘗て之れと交ることを願はずんばあらず、勢崇く權重き者を見ては、未だ嘗て之れと接ることを願はずんばあらざる也、而れども一交一接の間禍患此に由て而して基ることを知らず、保安を善せんとすとも夫れ何の益かあらんや。

其三十

客有問於余、曰、處順境易、處逆境難、信乎、余曰、兩者俱難、惟智者處之則無難也、順境者人易縱之時也、縱之不已則天奪其魄、故曰、小

人福薄、福過禍生、逆境者動作有悔之時也、悔之痛切則天佑之、故曰、弔者在門、慶者在閭、是故處順境而知懼、處逆境而知憂、則禍患不能及焉、上士達無憂、下士愚無憂、憂之所種正在中人乎。

【訓】客余に問ふこと有り、曰く、順境に處ることは易く逆境に處ることは難し信なるか、余が曰く、兩者俱に難し、惟り智者のみ之れに處れば則ち難きこと無し、順境とは人の縱にし易きの時なり、之れを縱にして已まざるときは則ち天其魄を奪ふ、故に曰く、小人福薄し、福過れば禍生ず、逆境とは動作悔有るの時なり、之れを悔ることは痛切なると則ち天之れを佑く、故に曰く、弔する者門に在れば慶する者閭に在りと、是の故に順境に處て而して懼るゝことを知り、逆境に處て而して憂を知れば則ち禍患及ぶこと能はず、上士は達して憂無く、下士は愚にして憂無し、憂の種る所正に中人に在るか。

「閭」里門

「上士」德優れたる人
「下士」德無くつまらぬ者

其三十一

恕之一字固爲求仁之要、量之一字又爲行恕之要、未有能恕而無量者也、亦未有有量而無恕者也、是故恕雖當勉、量亦多學、有杯盂之量、有池沼之量、有江海之量、有天地之量、天地之量、聖人也、江海之量、賢人也、杯盂之量、小人也、易喜易怒者、小人也、易與易奪者、小人也、未滿而先盈者、小人也、未富而先富者、小人也、中人則有寬有狹、賢人則多寬而少狹、至於聖人則萬物不能撓其志、與日月同其明、與鬼神合其德、蕩蕩愚愚無所不容矣、然則學量之功何先、曰窮理、窮理則明、明則寬、寬則恕、恕則仁矣。

【訓】恕の一字固に仁を求むるの要爲り、量の一字又恕を行ふの要爲り、未だ能く恕あつて而して量無き者は有らず、亦未だ量有つて而して恕無き者は有らざる也、是の故に恕は當に勉むべしと雖量亦學ぶこと多し、杯盂の量有り、池沼の量有り、江海の量有り、天地の量有り、天

「蕩々」廣大なる貌
「愆々」和樂の貌

地の量は聖人なり、江海の量は賢人なり、杯盂の量は小人なり、喜び易く怒り易き者は小人なり、與へ易く奪ひ易き者は小人なり、未だ滿ずして而して先づ盈る者は小人なり、未だ富まずして而して先づ富める者は小人なり、中人は則ち寛有り狹有り、賢人は則ち寛多くして而して狹少なし、聖人に至つては則ち萬物其の志を撓ること能はず、日月と其の明を同ふし、鬼神と其の德を合す蕩々熙々として容れざる所無し、然らば則ち量を學ぶの功何れをか先にせん、曰く理を窮めん、理を窮むれば則ち明なり、明なれば則ち寛し、寛ければ則ち恕あり、恕あれば則ち仁あり。

其三十二

老子動輒要絶嗜慾、男女飲食豈可絶耶、但不以彼累心節之而已、孟子曰、其爲人寡欲雖有不存焉者寡矣、謂之寡則可、謂之絶則未可。

老子動すれば輒ち嗜慾を絶たんことを要す、男女飲食豈絶つ可けんや、但だ彼を以て心を累はさずして之れを節する而已、孟子の曰く其れ人と爲り欲寡なければ存せざる者有りと雖も寡し、之れを寡しと謂ふときは則ち可なり、之れを絶つと謂ふときは則ち未だ可ならず。

下　樵談

樵、身也、談、心也、向月磵雲崖和樹聲答泉響高亦可、低亦可、繁亦可、簡亦可、猿鶴不忌、恐饒舌者語世人世人笑之耳、世人不談王道樵亦能笑之。

【訓】樵は身なり、談は心なり、月磵雲崖に向つて樹聲に和し、泉響に答ふ、高きも亦可なり、低きも亦可なり、繁も亦可なり、簡も亦可なり、猿鶴猜まず、鹿豕忌まず、饒舌する者の世人に語げば世人之を笑はんことを恐るのみ、世人王道を談ぜずんば樵も亦能く之を笑はん。

「饒舌」多辯

耕堯田者有水慮、耕湯田者有旱憂、耕心田者無憂無慮、日日豐年。

【訓】堯田を耕す者は水を慮ることあり、湯田を耕す者は旱を憂ることあり、心田を耕す者は憂無く慮り無し、日日豐年なり。

擘書覆瓿、裂史粘窓、誰不惜之、士厄窮途、落窠穽、聞者不憐、遇者不顧、聽其生死、是賢紙上之字、仇腹中之文、哀哉。

「瓿」小瓶

「窠穽」曲れる落し穴

【訓】書を擘いて瓿を覆ひ、史を裂いて窓に粘す、誰か之を惜まざらん、士窮途に厄し窠穽に落つ、聞く者憐まず、遇ふ者顧みず、其の生死を聽くに、是れ紙上に賢るの字、腹中に仇するの文なり、哀しい哉。

與邪佞人交如雪入墨池、雖融爲水、其色愈汚、與端方人處如炭入熏爐、雖化爲灰、其香不滅。

「端方之人」正しき人

【訓】邪佞の人と交はる雪の墨池に入るが如し、融て水と爲ると雖も其色愈々汚る、端方の人と處る炭の熏爐に入るが如し、化して灰となると雖も其の香滅せず。

小人出事剝竊入事熏修、是攘雞賽神、攫金妝佛。神佛其據我乎。

【訓】小人出ては剝竊を事とし、入ては熏修を事とす、是れ雞を攘で神

に賽し、金を擺んで佛を妝ふ、神佛其れ我に據らんか。

逢彼躁忿、如塗雪、著面、而易融、逢彼笑恕、如隙風、侵肌、而不覺。

「躁忿」怒に怒る　「隙風」隙もる風

【訓】彼が躁忿に逢ふ、塗雪の面に著くが如し、而も融け易し、彼が笑恕に逢ふ、隙風の肌を侵すが如し、而も覺えず。

子怨父、貧兄攘弟、富妻妾視豐儉、爲悲懽、奴僕視盛衰、爲勤怠、市道、不在門外矣、

【訓】子は父の貧を怨み、兄は弟の富を攘み、妻妾は豐儉を視て悲懽を爲し、奴僕は盛衰を視て勤怠を爲す、市道は門外に在らず。

殺人者死、定法也、酷吏殺人不死、謬將殺人不死、庸醫殺人不死、法、定乎、

【訓】人を殺す者は死す、定れる法なり、酷吏人を殺して死せず、謬將人を殺して死せず、庸醫人を殺して死せず、法の定れるか。

凶人祭祀吉神不饗、如君子不受小人之苞苴、吉人祭祀凶神不臨、如小人不登君子之俎豆。

「苞苴」贈り物　「俎豆」食物を盛る器

【訓】凶人祭祀して吉神饗ざるは、君子小人の苞苴を受けざるが如し、吉人祭祀して凶神臨ざるは、小人君子の俎豆に登らざるが如し。

聞君子議論如啜苦茗、森嚴之後甘芳溢頰、聞小人謟笑如嚼糖氷、爽美之後寬沍凝腹、或問優孟學孫叔敖、抵掌談笑、歲餘與叔敖無辨、今人終身學孔顏、何百不一如、曰心學滑稽易、口耳學聖賢難。

「苦茗」にがき茶　「森嚴」おごそかなること　「謟笑」こびを呈して笑ふ

【訓】君子の議論を聞くは苦茗を啜るが如し、森嚴の後甘芳頰に溢る、小人の謟笑を聞くは糖氷を嚼が如し、爽美の後寒沍腹に凝る、或ひと問ふ、優孟、孫叔敖に學ぶ、掌を抵て談笑し、歲餘にして叔敖と辨ずること無し、今人身を終るまで孔顏を學ぶ、何ぞ百に一つも如かざる、曰く心滑稽を學ぶことは易く、口耳聖賢を學ぶことは難し。

畫工、數筆、術者、片言、僧道、一經半咒、動得千金、文士刳精鉢心不博人一笑、吁士也賤何獨在茲。

【訓】畫工の數筆、術者の片言、僧道の一經半咒、動もすれば千金を得、文士精を刳り鉢心博からざれば人一笑す、吁士賤しきこと何ぞ獨り茲に在る。

携魚上砧、送蟹入釜、無不惻然、及坑才陷藝、惟恐不深、是不忍於細而忍於大。

【訓】魚を携へて砧に上げ、蟹を送りて釜に入る、惻然せざると云ふこと無し、才を坑にし藝を陷るゝに及んで惟だ深からざるを恐る、是れ細に忍びずして而して大に忍ぶなり、

闕金闕玉、不幸甚矣、而先人手澤、亦卷分帙散永爲不全之書、是遭無厭之秦也、哀哉。

【訓】金に闕り玉に闕ぐ、不幸なること甚だし、而も先人手澤、亦た卷を分ち帙を散じて永く全からざるの書と爲す、是れ無厭の秦に遭ふなり、哀い哉。

貴蓄孔鵰、賤視賓客、肥飼猿鹿、瘦役輿臺、不義而富貴者、之積習也。

「輿臺」身分の卑しき者、即ち使用人等

【訓】孔鵰を蓄ふる事を貴び、賓客を視る事を賤しむ、猿鹿を肥し飼ひ、輿臺を瘦せ役するは、不義にして而して富貴なる者の積習なり。

衣垢不澣、器缺不補、對人猶有慙色、行垢不澣、德缺不補、對天豈無愧心。

【訓】衣垢れて澣ず、器缺けて補はずんば、人に對して猶慙る色有り、行垢れて澣ず、德缺けて補はずんば、天に對して豈愧心無からんや。

古人歎未知爲人父之道而有子、今人未知爲人子之道而有子。

【訓】古人未だ人の父爲るの道を知らずして子有るを歎ず、今人未だ

人の子たるの道を知らずして而して子有り。

庸匠誤レ器、器可二他求一、庸婦誤レ衣、衣可二別製一、庸師誤二子弟一、子弟可二復胚一乎。

【訓】庸匠器を誤る、器他に求むべし、庸婦衣を誤る、衣別に製すべし、庸師子弟を誤る、子弟復胚すべけんや。

龍有二蛇之一鱗一、不レ害二其一、爲二靈一、玉有二石之一脉一、不レ害二其一、爲二寶一、士有二百行一、一行偶違、不レ害二其一、爲二君子一。

【訓】龍に蛇の一鱗有り、其靈たることを害せず、玉に石の一脈有り、其寶たることを害せず、士に百行有り、一行偶々違ふ、其の君子たることを害せず。

自己之僊、眞僊也、不レ求二繪鐘塑呂一、惑矣。

【訓】自己の僊は眞僊なり、眞僊を求めずして而して繪鐘塑呂を求む、惑へり。

堯行、舜趨、周冠、孔裳者恐未レ可二以貌定一也、使其見二遺金於曠寂之途一、遇二色婦一於空閑之室一而不レ動レ心、是堯舜返魂周孔復肉、不レ然仁義之賊也。

【訓】堯行、舜趨、周冠、孔裳なる者、恐らくは未だ貌を以て定むべからず、其れをして遺金を曠寂の途に見、色婦に空閑の室に逢ふて心動かざらしむ、是れ堯舜の返魂、周孔の復肉、然らずんば仁義の賊なり。

或問、浮屠氏以レ身爲二旅泊一、何必殫二費金米一、華耀土木一、曰、小人性貪、非窮レ奢極レ侈、無以起二其信心一。

「浮屠氏」仏徒
「華耀」美しく光りかがやかす

【訓】或ひと問ふ、浮屠氏身を以て旅泊と爲す、何ぞ必ず金朱を殫し費して土木を華耀するや、曰く、小人性貪る、奢を窮め侈を極むるに非ずんば、以て其の信心を起すこと無し。

君子、對二青天一而懼、聞二雷電一而不レ驚、履二平地一而恐、涉二風波一而不レ疑。

【訓】君子は青天に對して而して懼る、雷電を聞いて而して驚かず、平地を履んで而して恐る、風波を涉つて而して疑はず。

讀二孔孟之書一而不レ嗜レ殺レ人者、未レ爲二仁者一也、讀二孫吳之書一而不レ嗜レ殺レ人者、仁者也。

【訓】孔孟の書を讀て而して人を殺すことを嗜まざる者、未だ仁者たらず、孫吳の書を讀て而して人を殺すことを嗜まざる者、仁者なり。

東家富レ財、車馬接レ踵、西家富レ德、風雪閉レ門。

【訓】東家財に富む、車馬踵を接ぐ、西家德に富む、風雪門を閉づ。

燕處二文梁一、壘深雛煖、鳩棲二弱葦一、巢折身危、蕭曹得二其託一、勳成烈就、慶衍二後人一、且增失二其託一、義破忠殘、餒貽二先世一、然則劉季豪傑之文梁、項羽英雄之弱葦也。

【訓】燕文梁に處る、壘深して雛煖なり、鳩弱葦に棲む、巢折て身危し、蕭曹其の託を得て勳成り、烈就つて慶後人に衍なり、且增其の託を失ふ、義破れ忠殘ひ、餒を先世に貽す、然らば則ち劉季は豪傑の文梁、項羽は英雄の弱葦なり。

上交之難甚矣、百諂未二必喜一、一忠刻レ骨然之、百巧未二必錄一、一拙終レ身棄レ之、所以古人高二尙其事一。

【訓】上交の難きこと甚だし、百諂未だ必ずしも喜びず、一忠骨を刻んで之れを然りとす、百巧未だ必ずしも錄せず、一拙身を終るまで之れを棄つ、所以に古人其の事を高尙にす。

虎不レ食レ虎、人食レ人、虎不レ食レ子、人食レ子、哀哉。

【訓】虎虎を食はず、人人を食ふ、虎子を食はず、人子を食ふ、哀しい哉。

破瓜傷レ膚、壞梳櫛レ髮、色爲レ之變、聚珍瘞レ身、列艷靡レ骨、心爲レ之安。

「破瓜」十六歳の女

【訓】破瓜膚を傷り、塊梳髪を摘く、色之れが爲に變ず、珍を聚めて身を瘞め、艶を列ねて骨を醼にす、心之れが爲に安んず。

倚富者貧、倚貴者賤、倚强者弱、倚巧者拙、倚仁義不貧不賤不弱不拙。

【訓】富に倚る者は貧く、貴に倚る者は賤し、强に倚る者は弱く、巧に倚る者は拙し、仁義に倚る者は貧からず、賤しからず、弱からず、拙からず。

天不能家訓戸飭賢一人以誨衆人之愚、天不能家瞻戸給富一人以濟衆人之貧、非以賢私一身富私一家也。

【訓】天家々に訓へ戸々に飭めしむること能はず、賢なる一人以て衆人の愚に誨ふ、天家々に贍し戸々に給すること能はず、富める一人以て衆人の貧を濟ふ、賢を以て一身に私し富一家に私するに非ず。

附錄　清言二種　終

明治四十五年五月　五日印刷
明治四十五年五月　八日發行

禪學觀
定價金七拾五錢

著作者　加藤熊一郎
發行者　伊東芳次郎　東京市神田區鍛冶町八番地
印刷者　平井登　東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社分工場　東京市本所區番場町四番地
發行所　東京市神田區鍛冶町八番地　電話本局八八四番　振替貯金東京一七一番　東亞堂書房

不許複製

東亞堂出版圖書特約賣捌店

東京神田　東京堂書店　横濱市　第一有隣堂
同神田　上田屋　同　第四有隣堂
同神田　武藏屋　同　勉強堂
同神田　勉強堂　同　弘文堂
同神田　崇文館　同　弘集堂
同神田　二松堂　同奈川町　第三有隣堂
同日本橋　至誠堂　大阪市　杉本書店
同日本橋　北隆館　同　福音社
同日本橋　林平次郎　同　前川書店
同日本橋　文林堂　京都市　若林書店
同日本橋　榊原書店　同　東枝律書房
同京橋　目黑書店　神戸市　寶文館支店
同京橋　前川書店　名古屋市　川瀨書店
同京橋　東海堂　同　小澤百架堂
同本郷　日本堂　岡山市　山陽書籍會社
同麻布　森江書店　廣島市　友田書店
同本郷　日東堂書店　同　積善館支店
同小石川　鷄聲堂　久留米市　菊竹金文堂

熊本市　長崎書店
同　金書堂書店
鹿兒島市　谷村書店
福岡市　積善館支店
博多市　博文社
大分市　甲斐治平
長野市　西澤書店
松本市　水琴堂
長岡市　目黑書店
新潟市　萬松堂書店
金澤市　宇都宮書店
札幌區　富貴屋書店
小樽市　白鳥書店
秋田市　石川書店
弘前市　今泉書店
青森市　今泉支店
宇都宮市　內山集英堂
朝鮮京城　日韓書房
滿洲大連　大阪屋號

東亞堂發賣圖書目錄

郵券貳錢御送附あれば速時贈呈す

東亞堂書房創業第七週年記念出版

當代の達人福本日南先生の
一大達觀錄

好評
參版

日南集

菊判洋裝優雅
全二冊六百廿頁
寫眞版數葉挿入

正價貳圓
送費拾貳錢

烈々として霹靂の如く、奔湧として天馬空を行くの概あるは日南先生の文と想とにあらずや。本書、孟子論あり、人道觀あり、無政府主義論あり、大學教育觀あり、橋本左內、西鄕南洲、乃木希典、市川團十郎・淺井忠、原敬、クロパトキン、カアネギー、コッポ、エミュールゾラ等の人物月旦あり。英雄の典型を談じ、英雄崇拜論を鼓吹し、葉隱れの一章に我が武士道の眞髓を說破しては一讀懦夫を蹶起せしめ、九州史の研究、古史の三事實、上世の面影等を縱橫博識しては骨董的史學者輩をして後へに瞠若たらしむ。所論警拔、奇趣橫溢、眞に空前の熱烈文字也。

福本日南先生著

◉見よ六寸の掌上に秀吉、家康の二傑を飜弄せし大怪雄が活殺自在の快手腕を！

大好評
忽三版

黑田如水

黑田侯爵家什物
コロタイプ寫眞版挿入
菊判總クロース箱入極美本
正價壹圓五拾錢
送費十二錢

書者、豐太閤曰く「我れ大事に臨み、大難に會し、往々智謀き、謀慮し、氣息閉塞の時に當り、計なし、如水に問へば、必決立斷、未だ嘗て澁滯せしと非ず。而して其計たるや、悉我練熟慮せし所のもの、意表に出づ。且つ人となり剛毅敏慧、能く任じ、去度深遠、未だ其の匹を見ず、我れに代らん者は、恐らくは彼黑田ならん乎」と。而も今や日南先生、其の燃犀の史眼を放ち、豪爽、奔泉の如き快筆を驅て、遺憾無太閤の「智慧藏」たりし我が敵將の極めて歌詞に富める一冒一行を活寫す、獨り有益新奇なる史上の諸事實を發見せしむるのみならず。又以て人物鑑識上絶好の活模範たり、と云ふべし。

菊判全一册總クロス頗莊麗
コロタイプ美術版
口繪二葉挿入
正價壹圓貳拾錢
送費八錢

大好評
忽七版

直江山城守

（國民新聞）眼國時代の一傑傑として、朝ケ原一擧の黑幕として豐德兩時代變轉の機を其掌上に弄したる直江山城守の面目は日南氏の縱橫無碍なる才筆と、鋭透なる批評眼とによつて殆んど遺憾なく描盡せらる：塩梅自在直江山城守の史實近來の快著也。

（萬朝報）直江山城守の一生は飽くまでも清く高し、日南これを日本男兒の典型として天下に紹介す、行文烈々、字々火を噴く：痛快の書なるかな。

（やまと新聞）史眼卓拔、史筆縱橫、其眞面目を活寫し來りて更に秀吉、家康、三成、政宗、氏郷等一代の雄傑に對する交渉逆鱗の機を探り：痛切甘に徹せんとす。

（大阪毎日）從來を知らんとする者の必ず讀むべきもの。豐臣德川時代の人文形勢を知らんとする者の必ず讀むべきもの。

（大阪朝日新聞）當時第一等の人物なる直江山城守の事蹟は此書に依つて十二分に傳へられたり燃犀の筆致と烟眼の觀察とは近頃稀に見るの快文字なり。

◉著者本書の卷頭に叫んで曰く『自ら視てコンマ以上と爲し及コンマ以上たらんと欲する者は男兒中の眞男兒兼續其人の行實に察せよ』と

長谷場衆議院議長閣下序。福本日南先生序。伊藤痴遊先生著

賜天覽
蒙台覽

西郷南洲

大山元帥。東郷大將。伊東大將。三閣下證明

南洲翁眞影
外南洲翁遺墨及南洲翁寓居
終焉地等＝寫眞數葉挿入
全一册箱入洋裝美本
送費拾六錢

▲正價參圓五拾錢。

西郷南洲翁が少時に於ける艱酸より、惜しい哉其の蓋世の偉材を遂に城山に埋むる迄、極めて趣味深き小說體を以て詳細縱橫に之れを活寫し、實に身親しく當時の大活劇を目睹するに異らず。波瀾百出、痛烈悲壯一讀魂飛び、神慄く、翁が崇高なる大人格は、幾歲の後尙ほ人をして奮起せしめずんば已まざらむとす。眞に空前の大立志傳！

終編壹圓貳拾錢＝送費各八錢

偉人の熱血を以て彩れる痛快絶奇の新水滸傳

大判密行總ふりがな千二百頁の大册全部完成

伊藤痴遊先生著

好評再版

西郷南洲外編

僧月照

『大君の爲めには何か惜しからむ、薩摩の瀬戸に身は沈むとも』と、一首の和歌に憂國の赤誠を留めつ、西郷南洲翁と相擁し、波間の月影を碎きて身を海に投じたる傑僧月照は、抑も如何なる人物ぞ。噫吁！薩摩潟の月は變らず、御前崎の浪は昔乍らの響を傳へて、徒らに行人の袂を絞らしむ。實にや月照を度外しては幕末維新の歷史を語るべからず。著者の『西郷南洲外編』として水滸を成せるもの、實に故なきにあらざるなり。取材の多岐多方面にして、叙筆の趣味津々たるは著者が獨得の境場！一讀眉軒り、再讀眦を決して起たしむるの概あり。近時出色の痛快文字也！。

中判美裝全一冊
約三百八十頁
正價六拾五錢
送費六錢

誰れが讀みても面白く—誰れが讀みても有益なる—

著者が得意の名士逸話！

伊藤痴遊先生著

快傑傳

ポケット入洋裝
箱入美本全一冊
正價壹圓
送費八錢

乞ふ見よ本書内容の如何に趣味津々たるかを！

(1) 怪傑頭山滿
(2) 桂小五郎（木戸孝允の壯年時代）
(3) 板垣死すとも自由は死せず
(4) 幾多非人の恩人大江卓
(5) 巨人巨星享（一）（星亨と自由黨）
(6) 巨人星享（二）（新潟入獄事情）
(7) 政談演說公開の始祖荒川高俊
(8) 人崎兆民先生
(9) 中井櫻洲と中江兆民
(10) 中井櫻洲と大久保利通
(11) 木戸孝允と板垣退助
(12) 赤坂喰違岩倉公の遭難
(13) 近藤重藏と大鹽平八郎
(14) 御池の前福地源一郎
(15) 不遇志士赤井景韶
(16) 奇傑坂本龍馬（附女丈夫龍子）
(17) 陸奥宗光と小村壽太郎
(18) 澁澤榮次郎（昔の澁澤榮一）
(19) 羽柴秀吉中國引返し

以上

伊藤痴遊先生新著

好評三版

第二 快傑傳

生氣潑剌痛烈悲壯なる痴遊君得意中の最得意の二十四短篇逸話集！

(1)西園寺侯と中江兆民
(2)佐久間象山と吉田松陰
(3)江藤新平と福島中將
(4)江藤新平の最後
(5)勝海舟と宮島談判
(6)西郷南洲三たび流罪の事情
(7)偉人大久保利通
(8)憲法發布當日の悲劇
(9)志士來島恒喜
(10)大山彌助どん
(11)宗光丸の由來
(12)昔の山本權兵衛
(13)學界偉人福澤諭吉
(14)任侠醫部野手一郎
(15)軍神廣瀬中佐の恩師山縣小太郎
(16)侠客國定忠次
(17)女傑野村望東尼
(18)伊藤公と井上侯の血氣時代
(19)井上侯の長所短所
(20)西園寺侯の長所短所
(21)陸奥宗光と伊藤公の情誼
(22)寛政の名奉行
(23)白木屋呉服店創業の苦心
(24)山内一豐の夫人

袖珍箱入美裝
全一冊約七百頁
正價金壹圓
送料八錢

山路愛山先生著

好評三版

佐久間象山

象山先生肖像、象山自筆櫻賦 添附

大判美本約貳百九十頁
正價九十五錢
送料八錢

著者卷頭に序して曰く「人は自ら變化する能はず、水は自ら波を爲す能はず。唯天下の大勢に乘じ、天下の大機に參するものにして始めて竹帛の名を爲すべきなり、後の英才たるもの深く自ら鑑むる所なかるべからず：：象山の頭腦は何處までも科學的なり：：總ての事を斷ずるに精細なる計度を以てするの一事に至りては蓋し天下第一人なり：：公武合體論を主張し、彦根遷都を主張し、終に奇禍を買ひしもの、亦事實を崇び空想を卑みしに因らずんばあらず」と。之れある哉、當時海内最第一の新智識として、吉田松陰、勝海舟等諸傑の長師と仰がれ、維新志士中の高嶽として、他の群山衆峯を威服せるの威ありしことや。本書則ち——這の幕末に於ける科學的文明の卒先的輸入者。鎖國攘夷に反抗せる開國論の大頭目。砲銃、戰艦、諸機械等文明利器の創始的研究者。横濱開港の事實的主唱者。自己の血を以て泰西文明を購へる日本國民の大恩人——たる象山先生の卓拔高邁の偉人格と、堅實精博の大思想とを活寫し、配するに狂瀾澎湃たる維新活劇の一大背景を以てせる快著にして、行文烈々、字々聲あり。輕佻浮華の人心を革清すべき一大壯絶史傳也。

◉出でたり！　山路先生得意の海舟傳!!!

山路愛山先生著新

勝海舟

海舟先生肖像附
大判全一冊洋裝函
正價九拾錢
送料八錢

本書は英傑西郷南洲翁をして『勝氏へ初めて面會仕候處實に驚入候人物にて、最初打叩く積りにて差越え候處、頓と頭を下げ申候、どれ程智略之れ有るやら知れぬ鹽梅に見受申候、先づ英雄肌合の人にて佐久間(象山)より事の出來候儀は一層も越え候はん』と嘆せしめたる、海舟先生を傳するに、著者が獨特の史眼と、平明の快筆とを以てせるもの、所論警拔、趣味横溢且つ卷尾に『勝先生年譜』十數頁を添附し。縱横に曠世の大偉人が、修養、人格、機略、進退等の迹を解剖精叙し、坐乍ら勝先生に親炙して、以て其の波瀾重疊の經歷譚を聽くの思ひあらしむ近世立志傳の最上乘にして、又明治維新史の屈竟なる側面觀たり。

文學士　佐藤玉川先生著

近刊

快雄義經

(全一冊)　印刷中

世に涙多きは判官義經の生涯にあらずや。幼にして父を喪ひ、母を敵手に掠められて、轗軻不遇の間に人と爲り、骨肉辛かに相會するを得て、俱に宿敵を討殲したる歡びを分つの暇も無く長を凌ぐの大功は、恩賞を得ずして却つて奇禍を招き、身は頼朝の忌む所となつて、芳野の風雪、衣川の水、禍の手は遂かにみちのくの末に迄及び、英雄の末路歸する所なく、佳人『靜』を して泣いて『しづやしづ、しづのをだまきくりかへし、昔を今になすよしもがな』の悲歌を謳はしむ。嗚呼、義經は遂に高館の露と消えたるか、史家は斷じて、源九郎身を以て免れたるの證左なしと云ひ、世人は蝦夷及び滿洲蒙古の地を旅行して、義經に關する遺物の頗る多きを怪しむ、夫れ死せりと做すもの是か、免れたりと稱するもの非か、みちのくの天は語らず、衣川の水は默々として流る。只之れを本書讀者の判斷に任せむ而已。

機會は眼前に在り

「風雲に乘じて功業を樹てんと欲せば來て英雄に學ばずや？」

福本日南先生新著

英雄論

豈色を好むのみを以て英雄となさん。豈人を欺くのみを以て英雄の本事となさん。史學文章の泰斗カーライル曰く『英雄の傳記は是れ、全世界史の精髓也』と。世に興味深く、價値多きは夫れ英雄の言行事迹に非ずや、文壇の巨擘福本日南先生常に思ひを成敗興亡の理に潛めらるゝの傍ら、其の炬の如き批評眼に、上下數千載間の人材群英が偉勳鴻業の迹を大觀し、先づ筆を何をか英雄と云ふと起して、神人的英雄—英雄の風丰—英雄の本領—英雄の得能—英雄の資格—文學的英雄—の諸項に分ち、自在に質—英雄の襟度—英雄の人心收攬術—英雄の性癖—英雄の得失、史實を考覈し、逸話を旁證し、滔々數萬言、宛ら古今東西の偉人英雄を拉し來つて、得意の縱横博議を試みられたる大快天より落ち來る電火の如き豪爽の文を以て、一讀人をして手に唾きして起たゝしむるの概あり。著にして、卓厲風發、光焰萬丈、嗚呼！王侯將相寧ろ種あらん乎。人は何人と雖も英雄たるの資格を有す、苟くも當代に處して、コンマ以上の人物たらんと欲するの士は、疾く本書を繙いて、英雄敎の福音を傳へよ。

▲大判全一冊頗英本
▲豐太閤愛扇の圖外挿畫數葉挿入

正價壹圓
送料八錢

伯爵大隈重信閣下題詞
兒玉陸軍大將閣下遺墨
乃木陸軍大將閣下題詠
大迫陸軍大將閣下題字

石本陸軍大臣閣下題字
齋藤陸軍中將閣下題字
牛島陸軍少將閣下序文
竹迫陸軍歩兵大佐殿序文

陸軍歩兵中尉
安川隆治君著

身に七彈を被りて萬死の中に一生を得たる著者が血汗を絞り成せる日露實戰譚

血烟

（挿圖）

奉天に於ける著者の負傷（コロタイプ）
血烟天地に漲る二〇三高地の突撃（寫眞版）
廣瀬中佐銅像
忠魂碑
旅順攻圍軍外數葉
菊判美本約三百六十頁

正價壹圓
送料八錢

（賜天覽）

本書の著者、安川中尉は早稲田大學法科の出身にして、中隊長代理として征露の軍に從ひ二〇三高地の突撃四方臺の會戰等、大小幾十戰を經て、備さに楠風沐雨の苦艱を嘗め、夙に忠誠剛勇の名を稱せられしも、奉天大會戰の際、無殘！前後四回の重傷を負ひ、身に七彈を被りて、內地の各新聞紙上に戰死の報を傳へられたるの人也。而かも僥倖にも萬死の中に不可思議の生命を拾ひ得て、茲に當時の軍中日記を基礎とし、雄詭絢爛の才筆を驅て、其の再生の紀念たる『血煙り』を成せるものにして、句々熱涙、字々赤飯、同胞の血と、肉と、砲火とを以て彩られし、猛烈凄慘なる龍虎劇鬪の壯觀を精寫して、紙表鬼哭啾々の聲を聞く。彼の徒らに戰爭の慘禍を說きて、此種の著書に眼を掩ふ者は、決して勇氣ある男子の所爲にあらず。寒燈の下、短机の上、劍攔を撫しつゝ本書を讀まば啻に驚心駭目すべき血烟彈雨の大活劇を親睹するの愉快を滿喫するに止まらざるの實益を享けん、近來の快著也。

清國 吳汝綸氏遺墨
日本 福本日南氏 柳坡 小川運平先生著
『清國革命論』附添

新刊

支那及支那人

附錄(支那革命の眞相)

大判貳百廿頁
洋裝美本全一冊
正價八拾錢
送費八錢

支那現勢地圖
外口繪數葉添附

人を離れて、事なく、地を離れて、人なし。支那を知らんと欲するものは、單に其の山川の形勢、物資の集散、交通機關の過不及等を知るのみに滿足せず、進んで支那人を理解せざるべからず。是れ從來の地理書、紀行記等に未だ之れなくして、獨り本書のみ之れを詳記せる所なり。本書の著者は嘗て清國に遊ぶこと、再三數四、曾ならず、親しく彼れに於ける上下各階級の諸人士と交り、此の我國と最も親密の關係を有せる、唇齒輔車の同文國を理解することを極めて深く、政治の內情、外交の機變、人情、風俗、歷史等の見地より支那に於ける各人種の關係等に就き、微を聞き、細を拆き、支那及支那人に就きて縱橫精密の觀察を下し、以て本書を成せるもの、眞に是れ地理書以上の最近支那實情記と稱すべし。苟くも東洋の開發に志を有する者、及び對岸の寶庫に志を有する士は速に來つて本書を繙け、附錄「支那革命の眞相」は卷頭福本日南先生の『清國革命論』と相俟つて俱に經世の一大活文字！

大阪朝日新聞連載

爆發的大好評

綠園生著

豐臣秀吉

●立身出世の活例を指示せる「新太閤記」

見よ！草履つかみは愈々頭角を現し來れり！

●●菊判美本各卷三百數十頁
●●口繪各原色美術版挿入

正價一壹圓三 送費一冊八錢●●

(藤吉郎の卷後編——正價壹圓卅錢送費八錢)

過去の日本が產出せし英雄中の大英雄として、以て世界に誇るべき我豐太閤が波瀾萬丈の活生涯と、人材雲の如く、俊傑林の如き、我國史の華とも稱すべき戰國時代の龍驤り、虎嘯く壯絕快絕の大偉觀等を綠園先生が興味溢るゝ計りの史筆を揮て、縱橫に精叙せられたるもの、句々熱血、字々火を噴く、今や藤吉郎の卷成りて、談は益々佳境に進めり。一讀人をして發奮せしむべき空前の英雄立身傳也

▲日吉丸の卷 既成
▲藤吉郎の卷 既成
▲藤吉郎(後篇) 新刊
▲筑前守の卷 續刊
▲太閤の卷 續刊

新古講談の粹を萃めたる

袖珍講談叢書

◎飛び立つ程面白く、讀む度ひ毎に士氣を養ふ理想的の優等講談本

第一篇　小金井蘆洲述　**堀部安兵衛**　一册讀切　製本既成

第二篇　一龍齋貞山述　寛政　**曾我物語**　一册讀切　製本既成

第三篇　錦城齋典山述　**荒木又右衛門**　後日の仇討　一册讀切　製本既成

第四篇　西尾鱗慶口述　**大川友右衛門**　一册讀切　製本既成

第五篇　故松林伯圓述　**河内山宗俊**　一册讀切　製本既成

◎汽車中、電車中に於ける唯一無二の好伴侶

ロクロース表紙ポケット形美裝約二百五十頁

正價卅錢均一◎送費各册四錢

東亞堂發行傳記書類

報知新聞記者　熊田葦城先生著　○天覽少年武士道第一第二　全二册口繪入　正價各四拾錢　送費各六錢

堀内新泉先生著　○立志小說全力の人　全一册口繪入　合本美裝壹圓四拾錢　正價送費十錢

楓村居士先生著　○傳奇小說俠雄錄　口繪入全一册　正價六拾錢　送費八錢

伊藤痴遊先生著　○陸奥宗光　全二册中刷印　正價各九十五錢　送費各八錢

破魔禪居士著　○偉人修養史　全一册美洋裝　正價六拾錢　送費八錢

德富蘇峰先生序　鹽見戈山先生編　○修養逸話偉人の風化　全一册美洋裝　正價五拾錢　送費六錢

足立栗園先生著　○古英雄の生活觀　全一册美洋裝　正價參拾錢　送費四錢

山路愛山先生著　○武家時代史論　全一册美洋裝　正價六拾錢　送費六錢

東亞堂發行傳記書類

文學博士 幸田露伴先生著	○賴朝	全一冊 雅優頒	送價壹圓拾錢
文學士 幸田成友先生著	○大鹽平八郎	全一冊 極美本	送價壹圓五拾錢
毘尼薩台慶師校閲 青山霞村先生著	○深草の元政	全一冊 美洋裝	送價七拾錢
沼波文學士校閲 宮垣四海庵先生著	○俳味禪味（俳聖芭蕉傳）	全一冊 美洋裝	送價四拾錢
文學士 白河鯉洋先生著	○孔子	全一冊 頗莊麗	送價壹圓拾錢
白田石楠先生編	○西鄉南洲言行錄	全一冊 美洋裝	送價六拾錢
藤田長江先生編	○福澤翁言行錄	全一冊 美洋裝	送價四拾五錢
伊藤痴遊先生著	○吉田松陰	全一冊 中刷印	送價未定

324
298

324
293

324
293

019591−000−5

324−293

禅学観

加藤　咄堂／著

M45. 9

ABG−0365

36 2 6